The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	老いの変容 ： 自己性、標準性、時間
Author(s)	ヘイナマー, サラ
Citation	臨床哲学. 2016, 17, p. 77-93
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57566
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

老いの変容：自己性、標準性、時間

サラ・ヘイナマー

> 私自身も死ぬ――私がかつて生まれ、大人に成長し、老いたのと同じように。しかし問うべきは、これが何を意味するかだ。[1]

この一文はボーヴォワールの後期の著作である『老い』から引用されたものだとしてもおかしくないし、同様に、人間の条件としての時間性についてのサルトルやメルロ＝ポンティの思索に属していたとしてもおかしくない。しかし実は、現代の生の哲学者たちにはなじみの薄い、もっと遠い源泉から来ている。すなわち、この引用は、いわゆる間主観性の巻に見られる、人間存在の有限性についてのフッサールの省察から来たものである。引用されたパラグラフは、死と誕生が歴史性・無意識・性的差異とともに、発生的現象学によって研究されるべき超越論的問題群に属するという、フッサールの成熟した洞察（Husserl 1970, 187-188）[2]をよく表している。哲学の課題は、これらの現象を説明することではなく、その意味を解明し、間主観性と客観性の構成においてこれらの現象が果たす役割を解明することである（ibid.）。

本稿は、古典的なフッサール現象学の方法論的枠組みの内での、シモーヌ・ド・ボーヴォワールの老いへのアプローチを検討する。筆者のねらいは、ボーヴォワールの『老い』[3]の歴史的再構築を提供することでも、このテキストの包括的な読解や詳細な解釈を提供することでもない。むしろ、筆者はボーヴォワールの著作において哲学的に最も重要で批判に耐えうると考えられる三つの洞察に焦点を当てようと思う。そしてまた、これらの洞察を老いの現象の体系的な説明へと発展させたいと思う。筆者が本論で主張するのは、老いることは根本的には人格の変容であり、その人のその人自身と他者たちと世界とに対する関係の変化であり、それは単なる生物学的・社会的要因によっては説明できない、ということである。『老い』という著作への筆者の批判的・構築的アプローチは、老いの哲学に新たな貢献をすることを目指しているが、同時に、私たち――今日の人間の条件を論ずる者たち――がボーヴォワールの大胆なアプローチとその明瞭な洞察から多くを学ばねばならないのを証明することをも意図している。

私の理解では、『老い』と『第二の性』[4]は、方法論的に双子の姉妹となっている。人間の条件についての第一の広範囲な研究ときわめて類似した仕方で、ボーヴォワールは新しい主題に二重の照明を当てている。彼女は老齢という問題に――性的差異の問題にそうしたのと同様に――まず経験的に、次に哲学的にという、二つの異なる仕方で取り組んでいる。『老い』の第一部は、自然科学や人間–社会科学、生物科学、社会学、人類学、民族学、歴史学といった領域から得られる経験的な知見を検討している。第二部は、もう一つのアプローチを取って、省察のための異なる作業を提案している。ボーヴォワールは生きられた経験から出発し、それらを、経験することの個別の例として扱っている。彼女は、帰納的な推論や経験的な一般化によって話を進めるのではない。そうではなくて、老いるという経験の必然的で構造的な特徴を捉えることこそが自分の仕事だと考え、それを「人間的現実」の「定数」と呼んでいる。

生きられた志向的な経験へのこのようなアプローチは、古典的な現象学的概念によってもっともよく特徴づけられる。すなわち、哲学者は単独の経験から始めて、経験の一人称的な所与を捉えることを目指す。その仕事は個別のものにとどまることでも、それらを一般化することでもなく、あらゆる経験の必然的で構造的な特徴を探求するように前進することである。超越論的・現象学的還元と形相的還元という二つの還元が、経験される対象と経験する主観に関する自然的・習慣的先入見のすべてから研究を自由にするために必要とされる。理論的･実践的立場から､また伝統による先入見から意識を純化することによって、また、こうして純化された経験を想像的に変化させることによって、哲学者は意識的生の定数へと焦点を絞ることができる。哲学者は自分の個人的な生の構造に関心があるのではなく、また同時代人の生の構造にでもなく、あらゆる人間の生に――親密な親しまれた生だけでなく、歴史的に隔たったり文化的に異質な生にも――含まれる定数を見出すことをねらっている。こうした企図において、哲学者の最良の味方は、歴史家や小説家や詩人である。私たちは、こうしたねらいが『老い』の第二部冒頭でボーヴォワールによって明瞭に説明されているのを見出す。ボーヴォワールは、人間の経験の多様性と豊かさを報告することで満足せず、文化的・歴史的な特殊性を越えた普遍的特徴を記述し分析しようとしている。

> 私たちは、それらの定数を孤立させ、それらの相違の理由を見出すようにすることができる。……確かに､老人たちの境遇は時代と場所によって同じだったわけではない。

しかしこの多様性をつうじて浮かび上がってきて、時代に依存することなく、さまざまな証言を比較することを私に可能にしてくれるような定数があるのだ。[5]

確かに、人間の生の定数を探求することは、ボーヴォワールの第一の関心事ではない。彼女の目標は、むしろ、人間存在に尊厳と敬意をもって接することについての倫理的・政治的議論を進めることにある。しかし、彼女の倫理的・政治的主張は人間の生の普遍的構造に対する彼女の実存的・現象学的洞察にもとづいており、この洞察を批判的に展開するのが本稿の目標である。

老いることについてのボーヴォワールの実存論的・現象学的主張は、老いが人間の生の三つの基礎的な存在論的構造に関わっているということにある。すなわち、老いの時間性、対人関係における老いの客観化、老いが必然的にもつ身体的な次元である。彼女の見解にもとづいて、私は老いるという現象について三つの議論を展開したい。すなわち、①老いは本来、私たちに人格の変態（メタモルフォーゼ）として現れるという主張、②この変容は人格の習慣的な自己客観化における根本的な変化を含んでいるという考え、③老いは私たちの未来の地平だけでなくあらゆる時間的登録に、そして究極的には生きられる時間の構造全体に等しく影響するというテーゼ、という三つである。

1．老いという出来事

ボーヴォワールの老年についての議論に見いだされる第一の決定的な洞察は、老いることの存在的な意味に関わっている。老いてゆくという現象は、進行的な悪化やゆっくりとした変化から成るのではなく、突然の出来事やそうした出来事の連続から成っている。より正確には、老いることは経験的にはゆるやかなプロセスなのではなく、私たちを驚かせる予期せぬ出来事なのである。

ボーヴォワールは老いの出来事的性格を強調するためにさまざまな表現を用いている。彼女は、「驚き（サプライズ）」「出現（リヴィレーション）」「変態（メタモルフォーゼ）」「変容（トランスフォーメーション）」「危機（クライシス）」について語り、「普遍的時間の経過が個人的・人格的変態をもたらすということ、これが私たちをまったく面くらわせる」と書いている。そして、別の節では、こう述べる。

私たちは〔老いという〕一つの現実を身に引き受けなければならないのだが、この現

実は疑いもなく私たち自身であると同時に、外から私たちを捉え、私たちが捉えることができないものなのである。私たちの変化しない性質を保証する内的な感情と、私たちの変容という客観的な確実性のあいだには解決できない矛盾が存在する。私たちはこの二つのあいだを往ったり来たりするだけで、両方をいっしょにしっかりと把握することはけっしてできないのである。(290)

このようにボーヴォワールは生と自然を扱う経験科学から私たちが知っているのとはきわめて異なった仕方で老いについての説明を与える。老いつつある人間の身体は、劣化してゆく動物の有機体と等しくはないし、植物の生命と比較することもできない。人間の老いという現象はそれ自身の意味構造を持ち、探求の独自の変数を確定するが、この探求はあらゆる種類の自然主義的・生物学主義的な還元を掘り崩すものとなる。

社会科学では人格が何よりまず個人の集合のなかの一個人として研究されるが、ボーヴォワールの哲学的アプローチはそうした社会科学の方法とも異なる。ボーヴォワールは老いを一人称的なパースペクティブから説明する。つまり、彼女は何よりまず変化を経験する人にとって、それがどのように現れるか、あるいは与えられるかを問うのである。他者たちはこの種の探求から除外されはしないが、彼らはあくまで共に構成する者としてのみ意味の構成に参加するのであり、こうして経験する人格の構成的活動に依存している。共に構成する者として他者たちは外部から私たちを限定することはできず、私たちの能動的な参加とコミュニケーション的な協働を必要とする。

老齢についてのボーヴォワールのもう二つの洞察にとりかかる前に、老いを変態（メタモルフォーゼ）として記述しながら彼女が取り扱っている諸概念について、もう少し批判的に検討しておかなくてはならない。ボーヴォワールが老いの突然さを強調するために使う概念には、二つの異なる種類があることに留意することが重要である。彼女は一方で、変態や変容という存在論的な概念を使用するが、他方で発見、出現、実感といった認識論的な概念も操作する。これら二つの異なるタイプの概念は、異なる含意をもっている。

変態や変容という概念は、老いることはその人の根本的な在り方の変化であること、つまり存在論的変化である、ないしそれを含んでいるということを表している。これに対して、認識論的な概念は、老いはその人の突然の新しい状態を知るに至る認知的経験にすぎず、変容そのものは連続的で比較的ゆっくりしたものだ、という印象を与える。したがって私たちは、本当のところこの件に関するボーヴォワールの立場がどこにあるかを問わね

ばならない。老いることそのものが突然であると彼女は論じているのか、それともこの現象の実感が予期せずに来ると言っているにすぎないのか。彼女の省察の第一の結果が老いの突然さに関係があると筆者は主張したいのだが、この判定は拙速であろうか。

私の理解では、ボーヴォワールの哲学的議論は、知ることと在ること、ないし認識論的なものと存在論的なものという伝統的な二者択一のいずれかを選ぶものではない。彼女が主題としている根本的な緊張や曖昧さは、内的な知識と外的な現実の間の関係や、内的な感覚と外的な実体化の間の関係ではない。そうではなくて、自己関係の二つの異なる形式の間にある緊張であり、一つは直接的な経験によって生じるものであり、もう一つは他の主観との関係を通じて構成される他者である（Beauvoir 1976, 55）[6]。自己への関係のどちらの形式も、認識論的なパラメータと同様に存在論的なパラメータを含んでいる。

「老いの危機」は、私たちの実存に必然的なこの曖昧さ、言い換えれば次のような超越論的事実を浮かび上がらせる。すなわち、私たちはくり返し自身に世界への唯一の視点として直接に与えられており、なおかつ世界内の事物のなかの一個の世界内の事物として他者たちを介して与えられているという事実である。同時に、老いという現象は内的な確実性と客観的知識の間にある認知的緊張を悪化させる。存在論的な緊張と認識論的な緊張のいずれもが、くり返し私たちの状況を特徴付けているのだが、成熟と老いによる変態はこれらの緊張を露わにする（Beauvoir 1996, 292-296）。

このように理解すると、老いは一つの実存的状況から別のそれへの移行であり、その両方が認識論的二元性と同じく存在論的二元性を含んでいる。つまり、私たちは自分自身に与えられ、自分自身を直接に知る。しかし他者たちとの関係ゆえに、間主観的な媒介を通じてもまた、私たちは自分自身であり、お互いを理解する。老いという出来事においてはこのような複雑な構造に変化がもたらされる。それゆえ私たちは問う。こうしたにおいて正確には、私たちのどの部分が、あるいは誰が、変化しているのか、と。ボーヴォワールの『老い』は、の主体についても重要な手がかりを与えてくれる。

2．身体をもつこととその二つのアスペクト：異他性と標準性

ボーヴォワールの議論に見いだされる第二の重要な洞察は、老いの変態を経験する私たちの自己性の特定の側面に関係する。ボーヴォワールは、老いという出来事において変わるのは私の全体ではなく、その一部だけで、すなわち自己性の一契機あるいはある意味だ

けだと論じている。彼女の言葉によれば、突然老いるのは「私の内の他者」なのである。彼女はこの洞察をさらに仕上げて、次のように述べる。「私のなかで年取っているのは私の内なる他者、すなわち、私が他者たちにとってそうであるところのものであり、しかもこの他者は、私自身なのだ」。この変態において老いているのは正確には誰なのか、という実存的な問いを心に留めながら、この逆説的な定式化を詳しく探求する必要がある。

ボーヴォワールの定式化の前半部分は上述の問いに単純な答えを与えている。すなわち、私の内で老いる側面とは、他者たちに与えられる側面であり、何よりもまず彼らにとって存在している側面である。この答えからわかるのは、老いた人とは私たちが社会に依存しているがゆえに受容したり想定したりしなくてはならない仮面や役割のようなものだということである。ボーヴォワールの省察のいくつかの節は、こうした解釈の線を支持している。彼女はプルーストやアンドレ・ジッドから引用して、例えば仮面、コスチューム、変装、役割、演技といった比喩を導入するほか、サルトルのイマージュや実感不能という概念を使って、課せられた変化という考えを示唆している。特に、プルーストの『失われた時を求めて』からの引用は、老いた人をあたかもずっと仮面舞踏会にいて、誰だか分からず、向こうもこちらを誰だか分かってないような知人・友人のあいだを歩きまわっているかのように描くことによって、老いの疎外的側面を伝えることに効果を発している。

> 最初私は、なぜその家の主人やお客さんたちが誰であるのか分かるのに困難を感じたのはなぜなのか、そこにいる誰もが通常おしろいをつけて、まったく変わった姿にしてしまうような「おめかし」をしているのはなぜなのか、理解できなかった。……王子様は白いひげを生やして現れ、鉛の靴底のため足を引きずっていて、誰かの＜人生の老い＞の一部を演じているかのようだった。[7]

しかしながら、ボーヴォワールの定式化の後半部分は、老いた他者を主体自身と同定することによって、仮面、役割、演技という比喩に異議を唱えている。「私のなかで年取っているのは……他者なのだ」と書いたあとに、ボーヴォワールは、「しかもこの他者は、私なのだ」と付け加える。この逆説は、身体をもつことについてのボーヴォワールの現象学的な説明の枠組みの内で理解されなければならないと私は主張したい。ここで決定的なのは、私たち自身の身体は私たちにつねに二重の仕方で与えられているという考えである。すなわち、本来的にまた直接的には、可感性と運動性のシステムとして、そして、二次的

にまた他者たちとの関係を通じて間接的に、知覚可能で動かすことのできる客体として、である。これらは二つの別々の現実なのではなく、一つの複雑な現象の二側面もしくは二つの次元なのだ。このことが意味するのは、私たちが老いの「仮面」(296) について話すとき、この「仮面」は私たち自身の肉から離れたものではないということに留意しなくてはならないということである。むしろ、この仮面は私たち自身の可感性と運動性の「外面」でありながら、それは私たち自身の身体的過程と外的な出来事とをともに与えている感覚・運動・情動と絡み合っている。この「仮面」は決して投げ捨てられえないし、私たちの感覚–運動や情動的経験から切り離せない。それゆえ、私たちがこの仮面を外すときには、人生も外さなければならなくなる。

仮面、役柄、演技という演劇的な比喩は、老いた主体の内にある、コギト(「私は苦しむ」「私は泣く」) と外的な見かけ (「彼は苦しむ」「彼は泣く」) との間の内部分裂を主題化するのに照明を与えてくれる。しかしこうした比喩的な道具立ては、もし私たちが年老いることは演技であり、社会的・文化的な約束事か人工物なのだと結論づけたり含意したりするなら、誤解を招くものとなるだろう。老いることは老いた人という役柄を演ずることに同意したり、他者の反応・要求・期待に合わせるためにその役柄を自らに課したりしたということではない。私たちは老いを演じるのではない。なぜそんなことをするだろうか。私たちは老齢に屈服し、そして老いていくのである。

ボーヴォワールはこの逆説的な状況をサルトルの用語で説明する。彼女の説明によれば、私たちは自分の年齢を「対自の様態において」経験するのではなく、私たちの「対他存在」においてそれに出会うのである。彼女によると、その不一致(ディスパリティ)は、私たちが若さと老齢の違いを他者の顔や身体から学ぶという根本的な事実から生じて、その区別を後になって私たちの客観化された自己にあてはめて実感するようになるだけである。私たちは年齢の質を直接に自分自身に結び付けるのではなく、媒介を通じて、つまり他者を知覚することや、他者が私たちを知覚することを介して結びつけるのだ。さらにボーヴォワールは、私たちは決してこの年齢の質を私たちの絶対的な対自存在に関係づけることはできないと示唆する。彼女はこう述べる。「老齢を引き受けることがとくに困難なのは、私たちがつねにそれを自分とは関係のない異質なものとみなしてきたからなのだ、——私はいぜんとして私自身であるのに、別の者となってしまったということがありうるのか？」。

ボーヴォワールが主題化しているこの不一致は、現象学的な用語を使えば以下のような仕方でさらに正確に記述できる。「老いる」という条件が私に関わってくるのは、私が知

覚可能で社会的に意味のある身体として客観化される限りにおいてのことである。いいかえれば、知覚可能で他のあらゆる行為者にとってもひとしく接近可能な道具的世界の一部として私が私自身に与えられるのである。この客観化された自己は、私の身体性の唯一の側面なのではない。それに加えて、それに先立って、私は触れ–触れられ、動き–動かされる力として私自身に与えられている。私の最初の身体的自己は、あらゆる知覚する人に等しく与えられる、知覚可能な事物でもなければ、共同の世界の価値づけえない客体でもない。むしろ、私の最初の身体的自己は、私にとって触覚的で運動感覚的な感覚において、また、自己に触れる自発的運動において私にとって構成されているような、私の生きられた身体なのである。したがって、この不一致とは、世界の内で間主観的に与えられた存在としての私の身体と、世界への私のすべてのの中心としての私の身体との間の不一致なのである。

知覚可能な世界と個人的な環境における私の状況は、私の人生全体を通じて不断に変化している。私はいまここ大阪で講演をしているが、昨日はヘルシンキのオフィスで仕事をしていた。私は病気だったが今は元気だ。疲れ果てていたが、いまは幸福で精力的だ。これらの質の全ては私と他者たちの双方にとって異なる仕方で与えられており、他者たちとの関係ゆえに私は自分の状態と質について外部からの視野をも得る。

ときには、私の直接的な自己所与と間主観的な世界における私の表れは衝突する。疲れているように見えても精力的に感じていたり、注意深くしているだけなのに悲しそうに見られたりする。こうした部分的な衝突が、自己所与と間主観的な現れの間の全体的な、すべてを包括する食い違いを常にしるしづけるわけではない。しかし、実存の包括的な変化や危機を突きつけるような出来事もある。子供時代と青年時代に確立された、自己所与と客観的な現れの間の基本的なつり合いが、そのとき、ゆさぶられる（283-286）。私たちが感覚や運動や情動によって直接かつ「内的に」つかんでいる身体的な自己は、もはや他者たちを媒介にして私たちが「外的に」知る身体的自己と対応しなくなる。この意味で、私の実存的状況は変わってしまったのだ。

ボーヴォワールは、老いていくという出来事をしるしづける不一致は、ふつう他者たちの反応によって引き起こされると論じている。老いの出現はしばしば外から生じ、またつねに他者たちにとっての私の在り方に結びついている、と彼女は主張する。「年取った人は重大な変化を経験することなしに、他者をとおして自分を老いていると感じるようになる。彼の内的な存在は彼に貼られたラベルを受容しない。彼はもはや自分が何者であるか

知らない」。

したがってボーヴォワールによれば、年齢が私に関係するのはなによりまず私が他者たちに対するかぎりにおいてのことである。しかしながら、自己のこの客観化された意味は、私にとって異質なもの、押し付けられたものではなく、私が他者たちとの関係の内に生きている限りにおいて、また、他者たちが知覚可能な世界の構成に私と共に参加している限りにおいて、私自身の一部なのである。言い換えれば、私の外的な見かけは私にとって外部のもの・異質なものにとどまるのではなく――それは不可能だ――つねにすでにそうであるように、私の世界内存在に含まれているのだ。

老いの変態を引き起こすために必要なのは、現実の他者やみすぼらしい外見や哀れっぽい話ではない、ということをボーヴォワールは強調している。私たちの身体は、私たちが世界との個人的な関わりにおいて私たちに与えられているように、つねに他者の視線を含んでいる。老いの変態に入って行くには、私たちが私たちの身体の二つの側面の不一致を経験していることで十分である。すなわち、一方では、世界に接近するためのなじみの実践的で表現的な手段としての私たちの身体と、他方では、世界の公共的に観察可能な客体としての私たちの身体という、二つの側面である。この不一致は、可死性（死すべき存在であるということ）という特定の観念を連想させる。

すでに幼児期と青年期の変容（トランスフォーメーション）においても、全く同じ二元性が突然現れる。しかし老年期においてそれは特別な機能、つまり私たちの死を告げるという機能を受け取る。いま私たちの身体から落ちていったり、その上やその内で現れたりする物質的なモノ（オブジェクト）は、それが幼児期や若い頃にはそうであったように再生を告げるものではなく、何かが終わって行くことの象徴として機能する。抜け落ちる髪、欠ける歯、しみのできた震える手、垂れるまぶた、薄く黄色い爪――どれも私たちの髑髏の影だ。

妙に私たちの身体に属しているのに同時に私たちにとって異質であるような、これらの不思議な「モノ」の与えられ方をより詳しく調べてみる価値があるだろう。というのも、こうしたモノは老いの変態について何か大切なことを明らかにしてくれるからだ。私の論点は、老いはこうした現象に限定されないというところにある。これらに加えて、老いには身体的な能力や運動能力の点でも激しい変化が伴う。しかし、老いの重要な一般的特徴は、技能や能力の弱化に焦点を当てるよりも、こうした曖昧な「身体の一部」について研究することでより容易に解明されると私は思う。この特徴は老齢の不気味な性格であり、ボーヴォワールが言うように、異常な正常性、ないし「正常な異常性」なのだ。しかしな

がら、私はボーヴォワールの説明から距離を取って、老齢は他者たちの反応によって私たちに与えられるだけではないし、他者たちに対する私たちの身体に関わるだけではなく、生きられる身体性の習慣的な規範における変化を伴うものであるということを論じたい。こうして、私たちのもっとも物質的な身体部分は、老いのプロセスにおいてどのように現れるのだろうか。

歯や髪や爪が、私たちの知覚しつつ生きている身体から剥がれ落ちるとき、それらはあらゆる知覚者にひとしく近づきうる、れっきとした物質的なモノとして機能する。それらは他の世界内のモノと全く同じように床に落ち、それらを破壊しても私たちの身体における身体的な痛みや苦痛の感覚を引き起こさない。加えて、これらのモノは、自分自身によっても他者によっても、さまざまな視点から観察され扱われ研究される。ふつうはゴミとして扱われるが、ときに思い出の品として保存されることもある。そして、子どもの成長過程においてそれらは大切な象徴的価値を持っている。

他方、歯や髪や爪が、私たちの知覚しつつ生きている身体のまだ機能している部分のままであるあいだは、それらは私たちにとってれっきとしたモノのようには見えないが、感覚の場所や手段として、また実践的道具として役立っている。例えば、私たちの歯は、私たちの肌よりも触ることに敏感ではないし暖かくないが、それでもまだ、痛みの感覚と同様にを持っている。そして、たとえ私たちが髪のうちに何ら感覚をもっていないとしても、それはその重さ、暖かさ、位置、運動によっていつも頭皮の上に与えられている。感受性という点において、これらの身体要素の機能は、衣服や道具のような組み込まれた装置よりもずっと人格に統合されている。これら歯や髪や爪を失うとき、私たちは感受性のシステムにおける変化に適応しなくてはならない。

なるほど、こうした変化は私たちの自由意志をもつ自己にとっては異質で外的なものである。たとえば、私の髪は視界を遮るし、私の痛む歯は私が読み考えることに焦点を当てるのを邪魔するかもしれない。だから、私たちの身体とその部分は、私たちが自由に選んだ企投にとって障害物ないし邪魔者として現れることもある。こうした経験が病いと老いの現象の統合的部分を形作る。病気に感染した眼が遠くのものを見るのを妨げるかもしれないのと同じように、〔老いによって〕垂れ下がったまぶたは私のなじんだ視界を狭めるかもしれない。弱くなった脚は走ったり踊ったりするのを妨げるかもしれないし、震える手は〔かつての〕安定した手のようにものを切ったり叩いたりすることができない。

こうしたケース全てにおいて、私の身体は私の意志する自己にとって異質なものまたは

逆らうものとして現れてくるが、この意志する自己はあらゆる感受性から完全に独立しているわけでも分離されているわけでもないということに気づくのは決定的なことである。ここではとりわけ二つの要因が強調されねばならない。第一に、私の現に生きられている身体とその部分は邪魔者として現れるかもしれないが、そうしたことが可能なのは、私の意志する自己が異なった身体、すなわちより大きな力とより広い環境をもった感覚し動く自己になじむからに過ぎない。私のまぶたはいま垂れ下がったものとして私に与えられているが、それはかつてまぶたが軽かったからだ。私の脚は凝り固まった弱いものとして現れているが、それはこの脚がかつて遠くへ至る運動をすることが可能だったからだ。このように、私がいま身体をもつことが欠陥として現れているのは、それの以前のモードの背景に対してであって、人類に特徴的な一般形式や身体から脱した純粋な精神的意志に対してではない。第二に、私たちの弱まりつつある感覚器官や四肢は、幻滅させるとはいえ、実践的で感情的な周辺環境に接近し、知覚可能な領野を監視するための必要な手段である。いまや、このまばらな歯は、ものを噛み砕くための私たちの唯一の手段であり、このまぶたの垂れ下がった眼は、私たちが見るためにもっている唯一の手段である。この凝り固まった指も、この震える手も、指差し掴み愛撫する私たちの手段であり、重い足も空間のうちを動き回る手段なのである。

いま利用できる身体的手段は、これまでの習慣的な知覚や運動の標準から逸れているし、その最適の状態から逸れている。それらはともに、「異常な条件」(285) を生み出すが、それは外的な規準——知覚可能なもの、物理的なモノや他の類似の自己のもつ規準——との関係においてではなく、私たちの知覚的運動的生活において私たち自身のために確立した規準との関係において、そうなのである。しかし同時に、それらは別の標準と別の最適状態を設けている。こうして老齢は正しくも「正常な異常性」(286) と呼ばれるわけである。

この分析は、私たちの鏡に映った像が年齢によって影響を受けるのは二次的なことにすぎないということを示唆している。単に鏡や他者たちの顔を見つめるだけでは、自分が老いたことに気づくことはできない。私たちは、自分の新しい見かけを反射した像のなかで発見し同定するよりも前に、自分たちは変わってしまったと既に感じるか、疑っているにちがいない。ここで私の分析はボーヴォワールの議論の主軸からは離れることになる。それが意味するのは、老いは複雑な現象であって、対自存在と対他存在の違いによっては単純に捉えられない、ということである。私たちが老いたものとして現れる仕方はさまざまに異なっているが、互いに関連し合い依存し合ってもいる。すなわち、共有された世界に

属する何らかの対象物によって、間主観的な最適性から離れることによって、私たち自身の習慣的な標準からの逸脱によって、そして、新しい標準を設立することによって、である。

『老い』の中で、ボーヴォワールは、老いの危機はいくつかの異なった仕方で取り扱われうるのであり、あるものは他のものよりうまく行くと論じている。彼女は、かつての習慣にしがみついたり本質をでっちあげたりするというさまざまな形の自己欺瞞のなかに私たちは住むのかもしれない、と指摘する。あるいはその代わりに、私たちは変容を肯定し、いま手にしうる手段と能力でもって可能な最良のことをすることができる。私たちはなお対自存在と対他存在という二つの与えられ方のあいだを揺れ動くままでいることができる。さもなければ、これら二つの現われのあいだで新しい並行を見出そうとして、私たちの自己との関係および他者との関係に対して新しい標準を設立することもできる。いずれの場合でも、ある包括的な変化が、私たちが自分の目標と価値、および他者たちのそれらへの関わりを更新することを求めてくる。ボーヴォワールはこうした洞察を『老い』のなかで、『両義性とモラル』においてと同じ断固たる姿勢で表現している。

> もし老齢が私たちのこれまでの実存のたいしたことのないパロディであるわけではないなら、唯一の解決があるだけであり、それは私たちの人生に——個人や集団や原因や社会的、政治的、知的ないし創造的な仕事に身を捧げることのような——意味を与えてくれる結末を探求し続けることである。……或る人の人生が価値をもつのは、他者の人生に価値を付与する限りにおいてであり、愛、友情、憤慨、同情によってである。(540-541/567; translation modified)

私たちはここまで、老いの変容はさまざまな現象を含むものであることを見てきた。すなわち、働いている器官がその元気さをゆるめ、その物質性によって過剰に負荷をかけられる。私たちの行為と遂行は共通の規準からすれば不断に足りなくなってゆくが、自分自身の正常の基準からしてもそうである。他者たちは予期せぬ仕方で私たちに反応するし、私たちは鏡に映った自分の姿を認識することが難しいと自分で思う。ボーヴォワールが言うように、確かに私たちは他者たちの眼に老いているのだが、しかし同時に、私たち自身の生きられた身体の根本的な変容によっても老いているのである。

こうした外的および内的な肉体的変化に加えて、老いはものごとを経験することの時間的地平における変化をも伴っている。老いるとは私たちの過去が増え、未来が縮むことだ

という、常識的な考えに反して、私は以下では、老いることが両方向の地平に等しく影響を与え、それは最悪の場合、生きられる時間全体の地平構造の崩壊を意味するという、ボーヴォワールの洞察を発展させることにする。

3．時間性、死、未来

ボーヴォワールの第三の洞察は老齢の時間性に関するものである。彼女は老いのは、経験の時間的形式の根本的な変化、すなわち過去・現在・未来の三肢構造の変化をもたらすと主張する。生きられる未来と生きられた過去の両方が、老いの変容のなかで根本的な変化をこうむると彼女は言う。目の前に広がっていた未来は突然閉じられ、明るく鮮明に感じられていた過去はいまや重荷になる。老人は自分が、「限られた未来と凍った過去」の二つの石柱の間に囚われていることを見出す。

サルトルにしたがってボーヴォワールは、老いの変態における決定的な変化は未来の地平が閉鎖してしまうことである、と主張する。子供にとって、未来は限界が無い。若者にとって未来は、可能な活動と出来事のための限りない領野である。熟年・中年の人は毎年毎年を次から次に来たる無限定の連続だと見る。これに対して、老いた者は終点を想像できる者であるだけでなく、終わりを見つめ、そのそばで生きなければならない。未来はその伸び広がりを失った。人生は有限である。そして一年、一日、一瞬がみな、最後の停止――不可能だが不可避な停止――という考えの枠にはめられる。

> 中年と人生の最期とのあいだで、未来のまさに質が変化する。65 歳の人は 45 歳のときより 20 歳多く年を取っているというだけではない。人は無限定の未来――彼はそれを無限なものと見なしがちである――を有限の未来と取り替えたのである。かつてわれわれには地平線にいかなる限界も見えなかった、いまや私たちは一つの限界を見るのである。(378/400, translation modified)

未来が閉じられてゆくことはただちに過去のダイナミズムが衰えてゆくことに反映される。未来の企投が切り詰められ短くなり、そのタイムスパンが減って行くと、それは私たちの過去との接触をこれ以上支持できなくなる。過去を保持するためには、それを未来の企投によって実存に結び付けなければならない、とボーヴォワールは言う。死が私たちの

タイムスパンを限るようになると、私たちの人生の語りの構造は崩壊し、私たちの記憶は時間的な錨を失って漂流する。さいごには、過去は思い出されるのではなく、空虚なジェスチャーの中で甦らされ、繰り返される。ボーヴォワールは最後の過去を難破にたとえ、その浸水して沈む様子を次のように描き出している。

> 私がそのなかへ進んでゆくにつれて、それは崩れ落ちてゆくのだ。まだ見える残骸の大部分は色褪せ、ゆがみ、凍りつき、その意味が私を逃れてしまう。ところどころに、ときおりその憂愁な美しさで私を魅惑するものが見える。それらも、……「過去の砂漠」という、この空虚をみたすのに充分ではない。(365)

私たちはしばしば老人をロマンチックな用語で描いて、彼らはたくさんの年月を背後に持つ、すなわち長い実存あるいは歴史全体を持つと言うことがある。ボーヴォワールはこの常識的な考えを拒否して、過去は積み重なるのではなく、私たちの人生の最終局面では崩壊するのだと主張する。客観的な説明はそれぞれの人に長い歴史を結びつけることができるが、これは三人称的パースペクティブにおいてのみ可能なことである。老いた当人たちにとっては、過去は全く異なった仕方で与えられる。それは長く伸びるというよりは、重くなり、しなやかさを失い、不明瞭さの中に倒れてゆく。重さと重量の比喩は長さの比喩よりも老いの経験を正確に記述している。開かれた未来の助けなしには、生き生きした現在は膨大な過去の重みに耐えられない。未来の地平が閉じてゆくとき、生きられる時間の構造全体が震えだす。

こうした老いることについてのボーヴォワールの分析は、老人を特異な存在としてしまう。しかし強調されるべきは、老齢はこうした逆説ということではなく、人間の主体性を自由と超越によって定義している概念的枠組みにおいてはこのように現れるということである。老いた人は限界のそばに近づくが、その限界を乗り越えることはできない。さらに、彼はこの限界の近くで生きなければならず、死を超越しえないにもかかわらず意味を見いだすか創り出すかしなければならない。こうして、生は純粋な超越だとする考えを、彼の実存は問うことになる。

描写の否定的な調子にもかかわらず、ボーヴォワールは死を前にした意味ある生は可能だと言う。しかし、私たちが自らの個別的・共同的な生を完全に変革しないかぎり、この可能性は空虚なものあるいは単に概念的なものにとどまる、と彼女は言う。

老人たちの状態が本当はどのようなものかをいったん理解したなら、私たちは、もっと高い年金、ちゃんとした住居、計画された余暇といった、もっと寛大な「高齢者政策」を声をあげて求めることで満足できなくなる。大事なのは全体のシステムであり、私たちの主張は根源的であるほかありえない。すなわち、人生そのものを変えることである。(1996, 543)

死の近くにあっても、私たちの未来の地平は新しい次元へ開かれうる、とボーヴォワールは主張している。私たちの活動や投企は世代を超えて、多くの世代にわたって未来の他者たち、後継者たち、子孫たちに関係してゆく。しかしボーヴォワールによれば、こうした可能性は私たちの大多数にとっては概念的なものにすぎない。私たちはこうした開かれを想像してもよいし、歴史的、人類学的、民族誌的資源の内に記されているのを見出すことができる。しかし現在を見渡せば、こうした見通しは少数の例外的ないし特権的な個人にだけにしか与えられていないことに気付くのである。サルトルが言う、世代を越えた未来は、あらゆる人間の本質的な可能性なのではないし、レヴィナスが『時間と他者』(1987)や『全体性と無限』(1994)で論じているように、人間の生の構造的特徴なのでもない。世代を越えた未来は歴史的な可能性にすぎず、一部の人がとりうる選択肢であって、誰もがとりうる選択肢ではないことを、ボーヴォワールの分析は示唆している。「一般的に言って、父は自分の息子のうちに自分自身を見ない。何ものも彼を全面的に飲み込むことはない」と、ボーヴォワールは、レヴィナスの見解に暗に異議を唱えつつ、主張している。

ボーヴォワールにとって、世代を越えて未来が開かれることは文化的・歴史的な変数であり、人間的生の定数ではない。未来が開かれることは、ある文化のある人びとにとっては、かつては可能だったし、あるいは今も可能であると彼女は指摘するが、現代の工業技術社会においてはこの種の未来は非本質的な例外だと言う。ある特定の稀な実践のみが個人的な業績と達成の発展を許し、それが新しい企投のための出発点となることができるのであって、しかも、私たち自身のためばかりか、時間のなかで私たちの後に来る他者達にとっても、そうなのである。

現代ではあらゆる製品は消費に従属し機械的になってゆく傾向があり、また、高度の知的・精神的活動に従事する個人だけが、直接的な実用性の見通しを越えた未来を企投することができるのだ、とボーヴォワールは論じている。こうした専門家として、ボーヴォワー

ルは五つの例を挙げている。すなわち、科学者、哲学者、作家、芸術家、政治家である。これらの数少ない専門職においてだけ、個人的な時間は、すでに死によって不毛にされ過去を背負わされているが、子孫と後継者の未来への関係を再び開き、維持することができる。老いた人々の大多数は孤独と繰り返しと退屈のうちに、不毛で荒廃した人生を送るのだ。ボーヴォワールの幻滅を感じた見解は、ほとんど破滅的である。

> 過去の出来事、獲得された知識はその場所を保っているが、それらがかつてあったという、その火が消えた人生のなかでである。記憶にひびが入り、出来事はばかげた暗闇のなかに沈み込み消えて行く。人生は、ほどけた毛糸の束のように一つ一つほどけて行き、何も残さず、老人の手のなかで、毛糸の形なき束になっていく。(539-540/566, translation modified)

特権的な人びとだけが未来をより若い世代から得てくることができるという洞察は、『老い』においてすでに働いている。そこでは完全に展開されたり論証されたりしていないが、いくつかの力強いパラグラフにおいて明確に述べられ展開されている。筆者はここで体系的な解明を提供し、ボーヴォワールの論点をさらに展開した。私がこのことを行ったのは、文献解釈的な理由だけによるのではなく、より体系的な理由から重要だからである。ボーヴォワールはサルトルとレヴィナスよりももっと正確で新鮮な洞察を提供していると私は信じるからである。サルトルとレヴィナスはふたりとも、世代を超える未来は人間的生の構造的特徴だと言うが、ボーヴォワールはこの考えに異議を唱え、こうした形式の生きられる時間性は定数ではなく、歴史的・社会的状況に依存する変数であると主張するのである。

注

1 Husserlinana, Bd. XXIX, S.332.

2 Husserl, Edmund. 1970. *The crisis of European sciences and transcendental phenomenology: An introduction to phenomenological philosophy*. Trans. David Carr. Evanston: Northwestern University Press.

3 Beauvoir, Simone de. 1996. *The coming of age.* Trans. Patrick O'Brian. New York, London: W. W.

Norton & Company.

4 Beauvoir, Simone de. 1989. *The second sex*. Trans. And e. H. M. Parshley. New York: Vintage Books.

5 Cf. Beauvoir 1996, 361; 1989, xxxvi.

6 Beauvoir, Simone de. 1976. *The ethics of ambiguity*. Trans. Bernard Frechtman. New York: Citadel Press / Kensington Publishing Corp. ［*Pour une morale de l'ambiguïté*. Paris: Gallimard 1947］

7 Quoted in Beauvoir 1996, 289/307.

（訳：高原 耕平・浜渦 辰二）